

神様の救いに繋がる

丸山 勉

【聖書】 ルツ記 4章 6～17節

すると親戚の人は言った。「そこまで責任を負うことは、わたしにはできかねます。それではわたしの嗣業を損なうこととなります。親族としてわたしが果たすべき責任をあなたが果たしてくださいませんか。そこまで責任を負うことは、わたしにはできかねます。」かつてイスラエルでは、親族としての責任の履行や譲渡にあたって、一切の手続きを認証するためには、当事者が自分の履物を脱いで相手に渡すことになっていた。これが、イスラエルにおける認証の手続きであった。その親戚の人は、「どうぞあなたがその人をお引き取りください」とボアズに言って、履物を脱いだ。ボアズはそこで、長老とすべての民に言った。「あなたがたは、今日、わたしがエリメルクとキルヨンとマフロンの遺産をことごとくナオミの手から買い取ったことの証人になったのです。また、わたしはマフロンの妻であったモアブの婦人ルツも引き取って妻とします。故人の名をその嗣業の土地に再興するため、また故人の名が一族や郷里の門から絶えてしまわないためです。あなたがたは、今日、このことの証人になったのです。」門のところをいたすべての民と長老たちは言った。「そうです、わたしたちは証人です。あなたが家に迎え入れる婦人を、どうか、主がイスラエルの家を建てたラケルとレアの二人のようにしてくださるように。また、あなたがエフラタで富を増し、ベツレヘムで名をあげられるように。どうか、主がこの若い婦人によってあなたに子宝をお与えになり、タマルがユダのために産んだペレツの家のように、御家庭が恵まれるように。」

ボアズはこうしてルツをめとったので、ルツはボアズの妻となり、ボアズは彼女のところに入った。主が身ごもらせたので、ルツは男の子を産んだ。女たちはナオミに言った。「主をたたえよ。主はあなたを見捨てることなく、家を絶やさぬ責任のある人を今日お与えくださいました。どうか、イスラエルでその子の名があげられますように。その子はあなたの魂を生き返らせる者となり、老後の支えとなるでしょう。あなたを愛する嫁、七人の息子にもまさるあの嫁がその子を産んだのですから。」

ナオミはその乳飲み子をふところに抱き上げ、養い育てた。近所の婦人たちは、ナオミに子供が生まれたと言って、その子に名前を付け、その子をオベドと名付けた。オベドはエッサイの父、エッサイはダビデの父である。

【序】 大きな拡がりを見せる「ルツ記」

今月はルツ記をご一緒に読んで参りました。全4幕から出来ている舞台のように、全4章からなる物語ですが、今日はそのハッピーエンドになる最終章の4章を少し見てゆきたいと思います。一ユダヤ人であるナオミと異邦人の嫁ルツという、市井の女性たちの物語と言えますが、この4章には、旧約聖書の枠を超えて、新約聖書

に繋がる大きな広がりも見せてくれるスケールがあるように思います。

[1] ナオミとルツ、ボアズの出会いの不思議さ

少し振り返ってみますが、ボアズという人は、ナオミの亡くなった夫エリメレクの親族でした。そのボアズの持っていた畑地で、ルツは落ち穂拾いをし、その時にボアズはこの外国人女性ルツに優しい配慮を示し他のです。そのことをルツは義母ナオミに報告すると、彼女はとても驚きました。何故なら、ボアズという人は、エリメレクの家を絶やさないようにする責任のある一人であって、まさかルツがその人の畑に行っていたとは、ナオミは思ってもいなかったからです。しかも、そのボアズがルツに厚意を示している。…**出会いの不思議さ**ですね。えっ？ そんなことがあるの？ と、私たちも神様と出会うためには、振り返ると、自分が計画したことではない出会いや、そのような環境にいつのまにか置かれていた、ということがあるのではないかと思います。この出来事もナオミたちの思いを超えていたのですね。

そして、ルツはナオミの言葉に従って、ボアズが麦の収穫が終わった夜、寝ているボアズの衣の裾にそっと忍び込みます。夜中に気づき、驚くボアズにルツは言います。「あなたは家を絶やさぬ責任のある方ですよね、どうか私を衣で覆って下さい」と、まあ、自分からプロポーズをするのです。ボアズは、それに対しては即答はせず、「あなたは立派な婦人だ、心配しないで良い」と言いながらも、まず私よりも先にエリメレクの家を継ぐ責任のある親族がいるからその人が受け入るかどうかを尋ねる必要があります、しかしその人が責任を果さなければ、私が責任を果しますと言ったのですね。そして今日の4章に、その結論が記されています。

結果は、ボアズが尋ねたその親族は、亡くなったエリメレクの畑を買い取ることは受け入れましたが、エリメレクの義理の娘となったルツを引き取ることまでは出来ないと言ったのです。その人は、「**そこまで責任を負うことは、わたしにはできかねます。それではわたしの嗣業を損なうこととなります。**」(6節)と言いました。“**嗣業を損なうことだ**”と。これはどういうことでしょうか？ 多分、ルツがモアブ(つまり外国人)の女性であるということを受け入れられなかったというのが大きな理由ではないでしょうか。ユダヤ人は血筋ということを重ねていましたから、それは困ると考えた。しかしボアズも同じユダヤ人ですが、異邦人に対して広い心を持っていたことがこれまでの所からも分かります。このような人の存在が、後でも触れますが、救い主イエス・キリスト誕生に繋がる系譜に用いられているということは意義深いことだと思います。ボアズには、変な**偏見**というものが無いのです。

ボアズは、この親族とのやり取りを、町の長老たち 10 人に証人として来てもらい、町の門の所、つまり公の場所で行いました。これは、彼は自分の欲求第一では行動せず、神様の御心に従いたい、という彼の信仰が表れているように思えます。さて、

不思議な導きでボアズとルツは結婚しました。この夫婦を神様は祝福して下さいました。やがて男の子が生まれました。名前は**オベド**。その意味は、「神様に仕える者」と言う意味だそうです。このオベドの孫が、あの**ダビデ王**となるのです。

[2] 悲劇は、神様の織りなす刺繍の裏側

このように「ルツ記」は、ハッピーエンドで結ばれますが、1章では**悲劇から始まっていた**ことを思い起こします。ナオミは、夫エリメレクと共に、**飢饉**でベツレヘムでの生活が厳しくなり、隣国のモアブで暮すようになりました。しかし夫はそこで亡くなってしまいます。ナオミは外国で**寡婦(未亡人)**になりました。「なんで!？」と運命を呪いたくもなったと思います。しかも二人の息子たちは、そのモアブの女性を妻としましたが、その**ナオミの息子たち二人とも死んで**しまいました。どんなにナオミも、二人のお嫁さんたちも嘆き、涙したことでしょうか。**人生は何と残酷なのだろう!**と思ったに違いないと思います。

やがて、ナオミは独りで飢饉が収まった故郷ベツレヘムに帰ろうとします。しかし、その嫁の一人であるルツがナオミにどこまでもついていったというそのことが、大きくその後の**救いの歴史の転換点に繋がっていく**のです。ナオミも、ルツも、当然ながら、今、新約聖書の時代に生きる私たちが知っている**救済史**の中に、自分たちの辛いことも多かったけれども一生懸命生きた人生と、素朴な神様への信仰が用いられるなどと思うことはなかった訳ですよね。

この物語を思い巡らす中で、私は思い起こした文章がありましたので紹介させて頂きたいと思います。「伝道の書」(コヘレトの言葉) 3:11に、「**神様のなされることは皆その時にかなって美しい**」という聖句(口語訳)がありますが、この聖句からの小島誠志先生(日本基督教団牧師・元総会議長)のミニメッセージです。

「人生不可解。そう言って自死した青年がいました。人生は複雑であり、混乱しており、人は無意味に苦しんでいるように見えます。しかし忘れてはなりません。私たちは神の織りなす刺しゅうの裏側を見ているだけなのです。表には絶え間なく美しい模様が刻まれています。この表を、私たちはいつか見せて頂く時が来ます。その時耐え忍んで良かったときっと思うのであります」。

私は、本当にそうなのだなあといい、慰められました。私たちは、どのような生き方をしようとも、苦しい出来事から逃れられないことがありますよね。「神のなされることは美しい」などとはとても思えない、辛い悲しい現実に襲われる時もありますし、不条理な出来事に見舞われ、涙が溢れる日もあります。けれども、それは、「**神様の織りなす刺しゅうの裏側**」なのだと思えたら、それは全く新しい景色にな

るのではないのでしょうか。刺しゅうの裏側は、とても綺麗なデザインとは言えないでしょう。何でこの糸がこんな離れたところに引っ張られているの？と思ったりもします。しかし、裏側はそうだけれども、ひっくり返して表側を見ると、何と美しい模様がそこに現れ出ていることでしょうか。私たちの人生も、裏側だけしかないと思っている内は、嘆きしかないでしょう。しかし、表側の模様もある。必ずあります、というのが、聖書が告げる信仰の世界です。

[結] 神様のご計画が成ることが「益」

このルツ記の中で、ナオミは、ルツとボアズの子が生まれることによって、苦役の人生(マラ)から、生き生きとした喜びある人生(ナオミ)の人生を取り戻したという結びになっていますが、この息子の誕生というのは、これまでのイスラエルの歴史に新しい光を与えるものとなったのです。そもそもモアブ人の先祖というのは、創世記 19 章にありますように、アブラハムの甥のロトとその娘との間に生まれた(つまり近親相姦) 子供から始まっているのです。隠しておきたい歴史です。

さらに聖書で隠していないのはタマルの名前です。12 節では、ルツがオベデを生んだ時に人々は次のように祝福したとあります。—「どうぞ、主がこの若い女によってあなたに賜わる子供により、あなたの家が、かのタマルがユダに産んだペレツの家のようになりますように」。ここでペレツの家が讃えられていますが、その母親のタマルは、創世記 38 章を見ますと、娼婦のようになって、その義理の父であるユダとの間に生まれた子がペレツなのです。少しも美しい話では無いのです。けれども、このルツ記ではその系図＝それは罪と恥の歴史と言っても良いでしょう＝を隠すことなく示しています。それは、人間の罪を覆う、神様のスケールの大きなご計画がここに示されている、ということなのではないのでしょうか。

系図というのは、「時の流れ」そのものです。その意味で私たちの人生そのものも、系図と言えるのかもしれないと思いました。私たちは、皆、誰かと誰かの子供なのです。好むと好まざるとに関わらず、です。自分独りが天から降りてきたなどという人はいませんから、**皆、系図を持っています**。そして私たちの系図は、このルツ記と繋がっているとも言えます。苦しみ多い人生を送ったナオミ、あのモアブ出身の女性ルツ、その背景には、隠したくなる歴史もありましたが、それがすべて、その後、王ダビデへと繋がり、しかも、それにとどまらず、救い主イエス・キリストの系図へと流れ込んでいるのですから！このお方は、**すべての人を救うために来られた救い主**です。そのために、敢えて、あのマタイ福音書 1 章にある系図は外国人の名も記し、また、罪と恥にまみれた人々の名も隠さないのです。

今日の礼拝の招きの聖句で読んで頂いたローマの信徒への手紙 8 章 28 節にはこ

うありました。—「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」

ルツ記の物語を読むと、本当にその通りだな、と思います。しかし「益」というのは、何でも自分の思い通りになる、という意味ではありません。“御計画に従って召される”とありますように、神様のご計画が成就することが私たちにとっても「益」なのです。それは、時にゴツゴツとした「刺しゅうの裏側」のようにしか見えないことがあるかも知れません。私たちには神様のご計画をこの地上で知り尽くすことは出来ません。それがはっきり分かるのは、御国においてなのでしょう。

しかし、私たちには、**確かなお約束**があります！十字架に架かれ、復活されたイエス様はおっしゃいました。「私は世の終わりまであなたと共にいる」と！どうか、それを疑わないようにして欲しい、刺繍の裏側の模様だけに目を奪われないで、刺繍の表側が必ずあることを信じて良いのだと、そのように主は今朝も私たちに語ってくれています。私たちの罪も苦しみも、イエス様が全部背負って下さった、いや、今も背負って下さっている営みなのです。**私たちの人生のどんな歩みも、神様の大きな救いと繋がっているのです。**ナオミや、ルツ、ボアズの人生がそうであったようにです。何と幸いなことでしょうか。

お祈り致します。